

教育課題研究

児童生徒の主体的に学ぶ力を育てる指導・支援の在り方  
(2018年度－2019年度)

# 研究のまとめ

(二年次)

2020年3月

宮崎県立みやざき中央支援学校

# 目次

	ページ
はじめに	
I 研究主題	1
II 主題設定の理由	1
III 研究の仮説	1
IV 研究の内容	1
V 研究の組織	2
VI 研究の方法	2
VII 研究の計画	2-3
VIII 研究の実際	
1 キャリア教育研究班	4-9
2 保健体育科研究班	10
3 小学部研究班	
(1) 1年研究班	11-12
(2) 2年研究班	13-14
(3) 3年研究班	15-16
(4) 4年研究班	17-18
(5) 5年研究班	19-20
(6) 6年研究班	21-22
4 中学部Ⅰ課程研究班	23-26
5 中学部Ⅱ課程研究班	27
6 高等部Ⅰ課程研究班	28-29
7 高等部Ⅱ課程研究班	30
8 高等部Ⅲ課程研究班	31-32
(道徳授業実践研究班)	
(職業・共生コース研究班)	33-37
9 高等部作業学習研究班	38
10 寄宿舎研究班	39-44
IX 研究のまとめと今後の展望	45-46

## はじめに

本校は、知的障がいのある子どもたちが学ぶ特別支援学校です。学校経営方針の中で、『本校は、子どもたちが将来社会の一員として積極的に社会参加・自立していくことを願い、「共に生きる力」を培うことを本校教育の基本理念とし、・・・』というのがあります。

そのために意識して取り組んでほしいことが2つあると、私は思っています。

1つには、私たちはさまざまな活動の中で、子どもたちがもっている力を「のぼす」、つまり、縦軸の発達を促すように働き掛けます。そこで忘れてはいけないのは横軸の発達、つまり、子どもたちがもっている力を横に「ひろげる」視点です。さらに、それらの力を小学部から中学部、高等部へと縦に「つなぐ」ことと、例えば、国語で学んだことを数学で生かすなどの横に「つなぐ」視点です。これらの視点は教育の充実につながっていきます。2つには、「わかる」経験を積み重ねることで「できる」になり、「できる」をさまざまな活動に「いきる」状況をつくるのが、子どもたちの学びを深めていきます。

これらの考えを基に、研究部が掲げ推進し、小学部、中学部、高等部、寄宿舎がそれぞれに実践してきた本年度の教育課題研究（校内研究）のまとめや成果、課題等をみていくと、校内研究をとおして、いかに通常の「授業」や「日課」を大切にしたい学校づくりに取り組んできたかが理解できます。

校内研究で大切なのは、「みんなで考え、みんなで学び、みんなで動き出す」ことだと考えています。そのためには、先生方一人一人の思いや願い、そして、気付きを相互に交換し合うことが重要です。昨年度の研究を踏まえ、2年目となる本年度の実践研究では、各研究班の報告等の中で、「児童生徒の目指す姿を引き出すためには、指導者と児童生徒が、活動のイメージを共有することが大切である」「心が動く仕掛けや状況づくりは、主体的な行動へつながる」などの気付きがたくさんあり、先生方同士が学び合い高め合う姿を確認することができました。

「先生方は学校で育つ」といわれています。そのためには、先生方の学びを支援する組織的な体制が必要です。本校では、研究部が掲げる教育課題研究（校内研究）が、まさにその役割の1つを担っていると、私は捉えています。同僚と共に支えながら、同じ方向を向いて日常的に学び合い高め合う組織的な校内研究を推進することが、学校の教育力と組織力を高めていきます。本年度の校内研究により、また一歩本校の教育力（学校力）が高まったことを確信しています。

結びに、本年度の校内研究をまとめるにあたり、それぞれの立場で、ご尽力いただいた本校の全教職員にお礼申し上げます。また、本研究の推進にご協力、ご支援をいただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

令和2年 3月

宮崎県立みやざき中央支援学校  
校長 門田 誠

## I 研究主題

「児童生徒の主体的に学ぶ力を育てる指導・支援の在り方（二次）」

## II 主題設定の理由

平成29年度の特別支援学校幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領の告示に続き、平成31年2月に特別支援学校高等部学習指導要領が告示され、学習指導要領の改訂とともに特別支援教育も大きな転換期を迎えている。改訂された学習指導要領には、①社会に開かれた教育課程 ②育成を目指す資質・能力 ③主体的・対話的で深い学び ④カリキュラム・マネジメント の4つのキーワードが示されている。また、育成すべき資質・能力の3つの柱として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」が示されており、これらの観点に基づき各教科等の目標や内容も整理され、詳しく記載されている。このような学習指導要領の改訂を踏まえ、児童生徒の自立と社会参加を目指した授業の充実に向けて、これまでの授業の質を一層高め、児童生徒一人一人の生活に必要な資質・能力を育成できるように、私達教職員の専門性を高め、多様な学びに対応できる授業実践力を高めることが求められてくる。

本校の教育目標は、「自立と社会参加を目指して、自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童生徒の育成」である。児童生徒が将来社会の一員として積極的に社会参加・自立していくことを願い、「共に生きる力」を培うことを本校教育の基本理念として掲げている。この「共に生きる力」に基づいて本校では、平成27年度から平成29年度までの3カ年に渡り「共に生きる力を育む『新しい指導と支援』」を主題として、課題に応じて各学部の職員を混成したチームを編成し、研究に取り組んだ。この3カ年の研究で得られた成果としては、授業研究による授業改善はもちろん、学部間の情報交換により共通理解を図ることができたことが挙げられる。また、学部を超えて授業や指導・支援の在り方について協議することで、様々な課題解決を図ることができたことも挙げられる。このように一定の成果を得られた一方で、障がいの状態や程度が多様化する本校の児童生徒に対応するため、教育課程の検証、各教科等における教科指導、教科等を合わせた指導に関する内容の検証など、これまでの研究の成果をどのように日々の教育実践に生かしていくのか、課題もある。そして、先にも述べたが、改定された学習指導要領への対応も急がれる。

そこで、昨年度から本校では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の考え方を受けた研究主題を設定し、2カ年計画で研究を進めることにした。今年度は、その2年目となる。「主体的に学ぶ力」を育てるために、学習指導要領に基づき、どのような教育課程を編成し、それをどのように実践、評価、改善をしていくのかという「カリキュラム・マネジメント」を通じて、子どもたちにどのような資質・能力を育む必要があるのかを明らかにしながら、教育課程や年間指導計画、学習計画等を整理していく必要がある。そしてさらに、児童生徒一人一人の主体的に学ぶ力を高める日々の授業実践の充実を目指していきたいと願い、本研究主題を設定した。

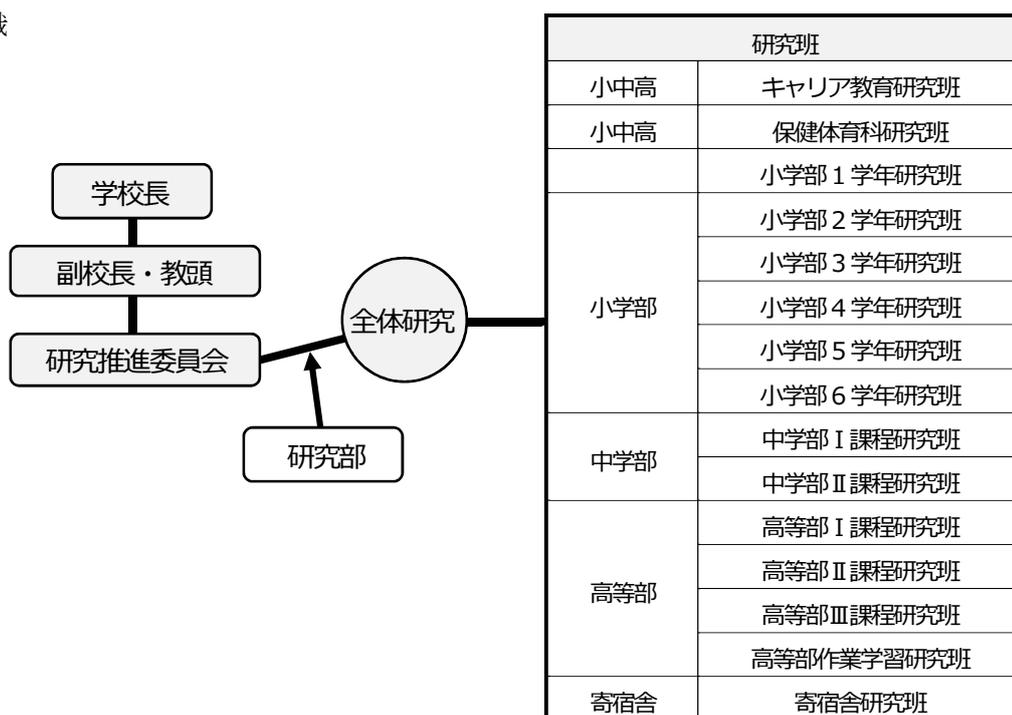
## III 研究の仮説

各研究班の取組において、新学習指導要領についての理解を深め、これまでに挙げられている課題を整理し、新学習指導要領に基づく新しい視点を取り入れた教育課程を編成したり、指導計画を立案して授業実践をしたることによって、児童生徒の望ましい発達・成長が促され、主体的な学びを育てることができるであろう。

## IV 研究の内容

新学習指導要領で指導・支援の視点として提示されている「主体的・対話的で深い学び」を実現するための「主体的な学び」に焦点を当て、学部の研究を中心として取り組んでいく。さらに学部を縦断した研究班も併せて編成し、キャリア教育等についても検証していく。本校がこれまでの研究で取り組んできた指導・支援について検証し、新学習指導要領に基づいて教育課程、指導計画等を見直し、指導・支援の方法について議論したり、授業研究を通じた授業実践の充実を図ったりしていく。

## V 研究の組織



## VI 研究の方法

研究組織を上記のようにして、新しい学習指導要領を理解しながら、教育課程の編成や年間指導計画等の見直しを行ったり、「主体的に学ぶ力」を育むための具体的な指導内容や方法及び支援の在り方について実践を通して検証したりしていく。また、併せて全体研究会や学部研究会、さらに全体研修を行うようにする。

### (1) 班別研究について

班別研究において、各研究班で研究テーマを設定し、それぞれで研究に取り組む。

### (2) 学部研究について

各研究班の取組の中間報告や研究内容に関する共通理解を図ることなどを目的として、学部研究を行った。

### (3) 全体研究会

最初の全体研究会において、今年度の研究についての取組や見直しを確認した。また、研究に取り組むに当たっては、OJT を意識しながら取り組むことや協働体制づくりを推進することなど、組織的な校内研究となるように全職員で共通理解を図った。

各研究班の1年間の取組の報告会を実施し、各班の情報交換を行うと共に、研究・研修の成果を共有する場とした。

## VII 研究の計画

### (1) 研究の期間

本研究は、平成30年度から令和元年までの2カ年で取り組む。

### (2) 研究の計画

以下の表1の通りに、今年度の研究を進めていった。

表1：2019年度 校内研究に係る計画（日程）

回	日付	時間	内容	備考
	4/5(金)		研究推進委員会①	
1	4/22(月)	35	研究担当者会	
2,3	5/24(金)	90	全体研究（今年度の研究について）	
4	5/31(金)	45	班別研究（新チーム顔合わせ、チーフ選出、計画等）	
5	6/20(木)	35	班別研究（内容・計画、ゴールイメージの設定）	チーム計画案提出
6	6/26(水)	35	班別研究	
7	7/5(金)	45	班別研究	
8	7/12(金)	45	班別研究	
9	7/30(火)	50	班別研究	
10	8/1(木)	50	班別研究	
11	8/19(月)	50	班別研究	
12,13	8/22(木)	90	全体研修（外部講師招聘）「キャリア教育研修会」	
14	8/27(火)	50	班別研究	
	8/28(水)		研究推進委員会②	進捗確認等
15	9/4(水)	35	班別研究	
16	9/10(火)	35	学部研究（進捗確認等）	
17	9/19(木)	35	学部研究（進捗確認等予備日）	
18	9/24(火)	35	班別研究	
19	10/11(金)	35	班別研究	
20	11/7(木)	35	班別研究	
21	11/15(金)	45	班別研究	
22	11/26(火)	35	班別研究	
23	1/7(火)	50	班別研究（研究二年次のまとめ→紀要原稿作成等）	
24	1/10(金)	45	班別研究（紀要原稿作成及び全体報告会の準備等）	
25	1/21(火)	35	班別研究（全体報告会の準備等）	
26	1/31(金)	45	班別研究（全体報告会準備等）	
27,28	2/7(金)	90	全体報告会（研究のまとめの発表）	
	3/18(水)		研究推進委員会③	次年度に向けての方向性等

※勤務体制の違いから、寄宿舎研究班については、別途計画を作成して研究に取り組む。

## VIII 研究の実際

### 1 キャリア教育研究班

「キャリア教育における一貫した指導を目指して」

#### ア 研究のねらい

「キャリア教育に関する実態評価表」の使用実施に向けて、その見直しや運用上の課題について検討し、キャリア教育に関する小・中・高の一貫した指導につなげる。

#### イ 研究の内容

本研究では、学校全体としてキャリア教育における一貫した指導を行うため、主に平成30年度の研究において作成された「キャリア教育に関する実態評価基準表」の改訂作業を行った。

##### 【キャリア教育に関する実態評価表の改訂について】

- ・ 内容の検討を行うにあたって、各学部の意見を集約し、課題を明確にした。
- ・ 段階は、学習指導要領を参考に見直しを行った。
- ・ 項目は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申案）」を参考に見直しを行った。
- ・ 内容の検討を行い、表現の統一に努めた。

##### 【キャリア教育に関する実態評価表に関わる文書について】

- ・ キャリア教育に関する説明を作成した。
- ・ 段階に関する説明を作成した。
- ・ キャリア教育に関する実態評価表についての説明文を作成し、記入の仕方を例示した。

#### ウ 成果と課題

##### (1) 成果

- ・ 学部での検討や、夏季休業中に菊地一文先生のキャリア教育に関する研修を受けたことで、職員全体でキャリア教育に関する共通理解を図ることができた。
- ・ 発達段階に応じた「キャリア教育に関する実態評価表」を見直し、来年度の試行や再来年度の本格実施につなげることができた。

##### (2) 課題

- ・ 「キャリア教育に関する実態評価表」を実際に使用し、内容の見直しや活用方法の検討を進めていく必要がある。その際、各学部ごとに説明と綿密な打ち合わせが必要となる。

##### 【本格実施に向けての試行案】

- ① 夏季休業中の研修にて、各学級1名ずつ評価する。

対象者：全学部全学級

- ・ 各学部や関係する校務分掌部と連携し、実態把握資料として現在使われている資料を目的に応じて見直し、整理していく必要がある。
- ・ 各学部の課題への対応を行う必要がある。

#### ※参考文献

- ・ 文部科学省（2018年3月）特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）
- ・ 文部科学省（2019年2月）特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（高等部）
- ・ 平成22年11月29日実施 キャリア教育・職業教育特別部会（第30回） 配付資料 資料2-2 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申案）「第1章 キャリア教育・職業教育の課題と基本的方向性」

キャリア教育に関する実態評価表

氏名 ( )

記入者：小学部 1年 ( ) 2年 ( ) 3年 ( )  
 4年 ( ) 5年 ( ) 6年 ( )  
 ※ 年生 月 日 転入 月 日 記入

分類	段階 項目	社会生活につながる基本的な行動を身につける段階			日常生活や社会生活及び将来の職業生活の基礎を育てる段階		卒業後の家庭生活や社会生活及び職業生活などを考慮した基礎的・発展的な力を育てる段階	
		1	2	3	4	5	6	7
A 人間関係・社会形成能力	①情緒の安定	親しい人や物の存在で落ち着くことができる。 小1 2 3 4 5 6	不安や緊張を表情等で表すことができる。 小1 2 3 4 5 6	好きなことや得意なことであれば落ち着いて活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、変化や苦手なことがあっても概ね安定して活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	変化や苦手なことがあっても自分で情緒の安定を図りながら活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	常に情緒は安定しており、落ち着いて活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	
	②意思表示 ※ 国語に関する力	好き嫌い、快不快などを自分なりの表現で表すことができる。 小1 2 3 4 5 6	好き嫌い、快不快を自分から伝えようとする。 小1 2 3 4 5 6	自ら好き嫌い、快不快を伝えることができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の気持ちを他者に分かるように伝えようとする。 小1 2 3 4 5 6	自分の気持ちを他者に分かりやすく伝えることができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて自分の意思を伝えようとする。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて自分の意思を的確に伝えることができる。 小1 2 3 4 5 6
	③挨拶・応答 ※ 国語に関する力	名前を呼ばれると目や頭など体の反応がある。 小1 2 3 4 5 6	促せば、頭を下げたり手を挙げたり挨拶や応答の模倣をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら身近な人に簡単な挨拶や応答をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら身近な人に挨拶や応答をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	身近な人に状況に応じた挨拶や応答をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら誰にでも挨拶や応答をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	相手や場に応じた挨拶や応答をすることができる。 小1 2 3 4 5 6
	④報告・連絡 ※ 国語に関する力	困っていることや要求を自分なりの方法で表現することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、困っていることや要求を伝えることができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら困っていることや要求を伝えることができる。 小1 2 3 4 5 6	日常生活の中で身近な人に定型文で報告や連絡をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	日常生活の中で身近な人に報告や連絡をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて定型文で報告や連絡をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて、的確に報告や連絡をすることができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑤質問・相談 ※ 国語に関する力	小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、困っていることや要求を「おねがい」「手伝って」と伝えることができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら困っていることや要求を「おねがい」「手伝って」と伝えることができる。 小1 2 3 4 5 6	日常生活の中で身近な人に定型文で質問や相談をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	日常生活の中で身近な人に質問や相談をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて定型文で質問や相談をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて、的確に質問や相談をすることができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑥協調性・集団参加	親しい人と一緒に落ち着いて過ごすことができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、支援者や友達と関わりながら活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら支援者や友達と関わりながら活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、相手に働きかけたり、あわせたりしながら活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら相手に働きかけたり、あわせたりしながら活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	集団の中で他者と協調しながら活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	社会生活の中で他者と協調して活動することができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑦礼儀・マナー	状況や場所がいつもとは異なることがわかる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、時と場を意識した行動を取ることができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場を意識した行動を取ることができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、身近な生活の中で適切なマナーやエチケットに気をつけて行動することができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら身近な生活の中で適切なマナーやエチケットに気をつけて行動することができる。 小1 2 3 4 5 6	社会の中でTPOに応じてふさわしい礼儀やマナーを概ね使い分けすることができる。 小1 2 3 4 5 6	社会の中でTPOに応じてふさわしい礼儀やマナーを的確に使い分けすることができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑧約束・規則	支援者と一緒に学校の約束・規則に従って、生活を送ることができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、学校の約束・規則を意識して、生活を送ることができる。 小1 2 3 4 5 6	学校の約束・規則を守って、生活を送ることができる。 小1 2 3 4 5 6	学校の約束・規則の意義を知り、生活を送ることができる。 小1 2 3 4 5 6	学校の約束・規則の意義を理解し、生活を送ることができる。 小1 2 3 4 5 6	社会のルールや法律の意義を知り、遵守することができる。 小1 2 3 4 5 6	社会のルールや法律の意義を理解し、遵守することができる。 小1 2 3 4 5 6
B 自己理解・自己管理能力	①自己理解	褒められていることがわかる。 小1 2 3 4 5 6	自分の良いところに気づくことができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の良いところ、他者の良いところに気づくことができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の良いところ、他者の良いところに気づき、良いところを取り入れようとする。 小1 2 3 4 5 6	自分の良いところや苦手なことに気づくことができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の良いところや苦手なことを理解することができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の良いところや苦手なことを正しく理解し、それに対応することができる。 小1 2 3 4 5 6
	②持続力	興味のある物や好きなことに興味を示すことができる。 小1 2 3 4 5 6	興味のある活動に0～10分程度継続して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	興味のある活動に10～30分程度継続して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、様々な活動に30分～1時間程度継続して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	様々な活動に30分～1時間程度継続して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	様々な活動に半日程度継続して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	様々な活動に1日継続して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6
	③集中力	小1 2 3 4 5 6	興味のある活動に0～5分程度集中して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	興味のある活動に5～10分程度集中して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、様々な活動に10分～30分程度集中して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	様々な活動に30分～1時間程度集中して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	様々な活動に2時間程度集中して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	様々な活動に半日程度集中して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6
	④正確性	作業的な活動に支援者と一緒に参加することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、作業的な活動に取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら作業的な活動に取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、正確さを意識して作業することができる。 小1 2 3 4 5 6	正確さを意識して作業することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、正確に作業することができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて正確に作業することができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑤活動態度	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、指示や修正を受け入れて作業しようとする。 小1 2 3 4 5 6	指示や修正を受け入れて作業することができる。 小1 2 3 4 5 6	どんな場面でも指示を受け入れて作業に反映しようとする。 小1 2 3 4 5 6	どんな場面でも指示を受け入れて作業に反映することができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑥体力	10分程度立ってもしくは相応の活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	30分程度立ってもしくは相応の活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	45分程度立ってもしくは相応の活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	2時間程度立ってもしくは相応の活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	半日程度立ってもしくは相応の活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	1日立ってもしくは相応の活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	1週間継続して活動することができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑦体調管理	保護者や支援者の管理の下、健康に毎日を過ごすことができる。 小1 2 3 4 5 6	体調不良などいつもと異なる体の状況を自分なりの方法で訴えることができる。 小1 2 3 4 5 6	体調不良などいつもと異なる体の状況について、休息をとったり衣類を調節したりして必要な対処を取ることができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、自分の体調に気を配ることができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の体調に気を配ることができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、自分の体調や衛生面に気を配り、運動するなどして、体調を整えることができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら自分の体調や衛生面に気を配り、運動するなどして、体調を整えることができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑧ストレスマネジメント	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	心、身体、行動に出るストレス反応について知っている。 小1 2 3 4 5 6	色々なストレス対処法を知識として知っている。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、自分に合ったストレス対処法を実行することができる。 小1 2 3 4 5 6	日頃から自分でストレスマネジメントを心がけて生活することができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑨清潔・身だしなみ	支援者と一緒に手洗いやうがいをする。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、手洗いやうがいをする。清潔な状態を保つことができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて、手洗いやうがいをする。清潔な状態を保つことができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、清潔を保ったり、身だしなみを整えたりすることができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら清潔を保ったり、身だしなみを整えたりすることができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて支援を受けて、清潔を保ったり、身だしなみを整えたりすることができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じて、自ら清潔を保ったり、身だしなみを整えたりすることができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑩排泄	支援者の支援を受けて排泄することができる。 小1 2 3 4 5 6	促されるとトイレで排泄することができる。 小1 2 3 4 5 6	自分で排泄することができる。 小1 2 3 4 5 6	報告(言葉・身体表現)してからトイレに行くことができる。 小1 2 3 4 5 6	時と場に応じてトイレに行くことができる。 小1 2 3 4 5 6		

C 課題対応能力	①目標設定 (P)	支援者と一緒に、何をどのようにどれくらいまで取り組むかを確認することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援者と一緒に、何をどのようにどれくらいまで取り組むか理解することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援者と一緒に、何をどのようにどれくらいまで取り組むか決めることができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の目標が達成できそうかどうか的確に判断することができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の能力に見合った具体的な目標を設定することができる。 小1 2 3 4 5 6	解決すべき課題を自ら見つけ、具体的な目標を設定することができる。 小1 2 3 4 5 6	卒業後の生活に向けて、解決すべき課題を自ら見つけ、具体的な目標を設定することができる。 小1 2 3 4 5 6
	②実行力 (D)	支援者と一緒に活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援者と一緒に目標を意識して活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援者と一緒に、目標達成に向けた活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	促して目標を意識して活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら目標を意識して活動しようとする。 小1 2 3 4 5 6	自ら目標達成に向けて活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら目標達成に向けて行動を修正しながら活動することができる。 小1 2 3 4 5 6
	③振り返り (C)・行動の改善(A)	支援者と一緒に、何をどのようにどれくらいまで取り組んだかを確認することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援者と一緒に、目標に沿ってできたかどうかを選択肢から選ぶことができる。 小1 2 3 4 5 6	支援者と一緒に、目標に沿ってできたかどうかを振り返ることができる。 小1 2 3 4 5 6	目標に沿ってできたかどうかを自分で判断することができる。 小1 2 3 4 5 6	目標に沿ってできたかどうか、また、目標が適切だったかどうかを自分で判断することができる。 小1 2 3 4 5 6	目標に沿ってできたかどうかを判断し、課題や解決策を考え、次に生かそうとすることができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の振り返りや他者からの評価を受け止め、課題や解決策を考え、次に生かそうとすることができる。 小1 2 3 4 5 6
	④自己決定	活動に対して、快不快を示す。 小1 2 3 4 5 6	自分の好きな遊びややりたい活動を2つの選択肢から選ぶことができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の好きな遊びややりたい活動を3～5つ程度の選択肢から選ぶことができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、自己の個性や興味・関心に基づいた選択をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	自ら自己の個性や興味・関心に基づいた選択をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の経験や他者の助言を参考に自分に合ったよりよい選択をしようとする。 小1 2 3 4 5 6	状況の変化に応じて柔軟に自分に合ったよりよい選択をすることができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑤情報の収集と活用	活動に対して、快不快を示す。 小1 2 3 4 5 6	季節や乗り物など身近なものへ興味をもつことができる。 小1 2 3 4 5 6	身の回りの様々な環境へ興味をもつことができる。 小1 2 3 4 5 6	身の回りの様々な環境へ興味をもち、支援を受けて調べることができる。 小1 2 3 4 5 6	身の回りの様々な環境へ興味をもち、自ら調べることができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の(職業・社会)生活に関連する情報や事柄が理解することができる。 小1 2 3 4 5 6	自分の(職業・社会)生活に関連する情報や事柄を理解し、情報収集や活用ができる。 小1 2 3 4 5 6
D キャリアプランニング能力	①役割の理解と実行	活動に対して、快不快を示す。 小1 2 3 4 5 6	好きな活動には取り組もうとすることができる。 小1 2 3 4 5 6	毎日の係活動などで、支援を受けて部分的に取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	毎日の係活動などで、自分の役割を理解し、取り組もうとすることができる。 小1 2 3 4 5 6	毎日の係活動などで、自分の役割を理解し、最後までやり遂げることができる。 小1 2 3 4 5 6	様々な場面で自分の役割を理解し、支援を受けて活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	様々な場面で自分の役割を理解し、責任を果たすことができる。 小1 2 3 4 5 6
	②スケジュール管理	支援者と一緒に取り組むことを確認することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援者と一緒に時間割ごとの活動の準備をすることができる。 小1 2 3 4 5 6	時間割やカレンダーの見方がわかり、おおよその予定を理解することができる。 小1 2 3 4 5 6	1日や1週間の計画表を見ながら行動することができる。 小1 2 3 4 5 6	予定をカレンダー等に管理する(記入や印つけ)ことができる。 小1 2 3 4 5 6	支援者と一緒に計画を立て、計画に従って活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	自分で計画を立て、計画に従って活動したり変更に対応したりすることができる。 小1 2 3 4 5 6
	③時間の認識 ※算数・数学に関する力	支援者といっしょに活動を始めたり終わったりすることができる。 小1 2 3 4 5 6	言葉かけやタイマーなどの合図に従って、活動を始めたり終わったりすることができる。 小1 2 3 4 5 6	時計やタイマーなどで時間を意識し、時間を守って活動することができる。 小1 2 3 4 5 6	時計の読み方を概ね理解し、言葉かけにより時計を見て行動することができる。 小1 2 3 4 5 6	時計の読み方がわかり、自ら時計を見て行動しようとする。 小1 2 3 4 5 6	時間を計算して、先の見通しを持ちながら行動することができる。 小1 2 3 4 5 6	時計や時刻表等を活用し、時と場に応じて適切な行動を選択することができる。 小1 2 3 4 5 6
	④金銭の取扱 ※算数・数学に関する力	買い物の際、支援者と一緒にレジで代金を払い、おつりや品物を受け取ることができる。 小1 2 3 4 5 6	お金との交換で買い物をすることがわかり、お金を大切に扱うことができる。 小1 2 3 4 5 6	金種の違いと関係について理解し、値段に対して適切なお金を選択することができる。 小1 2 3 4 5 6	お金を使った計算(合計、お釣り、両替等)を概ね理解し、買い物のとき活用することができる。 小1 2 3 4 5 6	自分で予算を決め、買物の情報を得て、使い方を計画することができる。 小1 2 3 4 5 6	収支を計算して適切にお金を使うことができる。お金のやり取りのルールやマナーを理解することができる。(おごり・貸し借り) 小1 2 3 4 5 6	自分で金銭管理ができ、貯金の必要性や方法を理解することができる。(キャッシュレス決済・ローン・キャッシングカード等) 小1 2 3 4 5 6
	⑤聞く力 ※国語に関する力	支援者の促しの言葉かけに反応する。 小1 2 3 4 5 6	支援者に注意を向けて、あるいは視線を合わせて言葉を聞こうとする。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、簡単な口頭指示を概ね理解し、正確に行動しようとする。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、簡単な口頭指示や説明を的確に理解し、正確に行動することができる。 小1 2 3 4 5 6	簡単な口頭指示や説明を概ね理解し、正確に行動しようとする。 小1 2 3 4 5 6	簡単な口頭指示や説明を的確に理解し、正確に行動することができる。 小1 2 3 4 5 6	複数の口頭指示や複雑な説明を的確に理解し、正確に行動することができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑥読む力 ※国語に関する力	提示した具体物や映像に視線を向ける、注視する。 小1 2 3 4 5 6	具体物や写真での指示、○×の意味を理解することができる。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて単語や短い文を読むことができる。 小1 2 3 4 5 6	自分で単語や短い文を読むことができる。 小1 2 3 4 5 6	公共でよく目にする絵やマークの指示の意図を理解することができる。 小1 2 3 4 5 6	簡単な指示を含んだ文を読み取ることができる。 小1 2 3 4 5 6	複雑な指示を含んだ文を読み取ることができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑦メモ等の記録 ※国語に関する力	支援者と一緒に行動することができる(写真、具体物添付)。 小1 2 3 4 5 6	支援を受けて、自分なりの手段で記録することができる。(シール、○×) 小1 2 3 4 5 6	なぞり書きや視写にて記入することができる。 小1 2 3 4 5 6	指示で必要なことを記述することができる。 小1 2 3 4 5 6	自分で考えて記述することができる。 小1 2 3 4 5 6	活動に必要な事項を整理して記録することができる。 小1 2 3 4 5 6	活動の反省・改善点等も正確に記録し、次回に活用することができる。 小1 2 3 4 5 6
	⑧自発性	支援者と一緒に好きな活動に取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	好きな活動には取り組もうとすることができる。 小1 2 3 4 5 6	気分や体調の影響にかかわらず、支援を受けてやるべき活動に取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	気分や体調の影響にかかわらず、やるべき活動に取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	気分や体調の影響にかかわらず、やるべき活動を理解し取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6	自分でやるべき活動を見つけ、取り組もうとすることができる。 小1 2 3 4 5 6	自分でやるべき活動を見つけ、工夫して取り組むことができる。 小1 2 3 4 5 6

【備考】※ 評価について補足説明等が必要な場合に記入する。

記入例：(小3時、A④3段階に○がついてると仮定して)

小4A④2段階：今年度は困っていることを伝えることができず、泣くことが多かったため。

## キャリア教育とは…

「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である。キャリア教育は、特定の活動や指導方法に限定されるものではなく、様々な教育活動を通して実践されるものであり、一人一人の発達や社会人・職業人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである。

## 基礎的・汎用的能力とは…

基本的・汎用的能力の具体的内容については、「仕事に就くこと」に焦点を当て、実際の行動として表れるという観点から、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力に整理した。

これらの能力は、包括的な能力概念であり、必要な要素をできる限り分かりやすく提示するという観点でまとめたものである。この4つの能力は、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため、特に順序があるものではなく、また、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。

これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるのかは、学校や地域の特色、専攻分野の特性や子ども・若者の発達の段階によって異なると考えられる。各学校においては、この4つの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体的な能力を設定し、工夫された教育を通じて達成することが望まれる。その際、初等中等教育の学校では、新しい学習指導要領を踏まえて育成されるべきである。

人間関係形成・ 社会形成能力	<p>○ 「人間関係形成・社会形成能力」は、<u>多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。</u></p> <p>○ この能力は、社会とのかかわりの中で生活し、仕事をしていく上で基礎となる能力である。特に、価値の多様化が進む現代社会においては、性別、年齢、個性、価値観等の多様な人材が活躍しており、様々な他者を認めつつ、それらと協働していく力が必要である。また、変化の激しい今日においては、既存の社会に参画し、適応しつつ、必要であれば自ら新たな社会を創造・構築していくことが必要である。さらに、人や社会とのかかわりは、自分に必要な知識や技能、能力を気付かせてくれるものでもあり、自らを育成する上でも影響を与えるものである。具体的な要素としては、例えば、他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等が挙げられる。</p>
自己理解・ 自己管理能力	<p>○ 「自己理解・自己管理能力」は、<u>自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。</u></p> <p>○ この能力は、子どもや若者の自信や自己肯定観の低さが指摘される中、「やればできる」と考えて行動できる力である。また、変化の激しい社会にあって多様な他者との協力や協働が求められている中では、自らの思考や感情を律する力や自らを研さんする力がますます重要である。これらは、キャリア形成や人間関係形成における基盤となるものであり、とりわけ自己理解能力は、生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深めていく必要がある。具体的な要素としては、例えば、自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等が挙げられる。</p>
課題対応能力	<p>○ 「課題対応能力」は、<u>仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。</u></p> <p>○ この能力は、自らが行うべきことに意欲的に取り組む上で必要なものである。また、知識基盤社会の到来やグローバル化等を踏まえ、従来の考え方や方法にとらわれずに物事を前に進めていくために必要な力である。さらに、社会の情報化に伴い、情報及び情報手段を主体的に選択し活用する力を身に付けることも重要である。具体的な要素としては、情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等が挙げられる。</p>
キャリア プランニング能力	<p>○ 「キャリアプランニング能力」(※)は、<u>「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。</u></p> <p>○ この能力は、社会人・職業人として生活していくために生涯にわたって必要となる能力である。具体的な要素としては、例えば、学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等が挙げられる。</p> <p>※「プランニング」は単なる計画の立案や設計だけでなく、それを実行し、場合によっては修正しながら実現していくことを含むものである。</p>

参考：平成22年11月29日実施 キャリア教育・職業教育特別部会（第30回） 配付資料 資料2-2 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申案） 「第1章 キャリア教育・職業教育の課題と基本的方向性」

【段階に関する説明】

段 階	社会生活につながる基本的な行動を身につける段階			日常生活や社会生活及び将来の職業生活の基礎を育てる段階		卒業後の家庭生活や社会生活及び職業生活などを考慮した基礎的・発展的な力を育てる段階	
	1	2	3	4	5	6	7
対 象	他人との意思の疎通に困難があり、日常生活を営むのに <u>ほぼ常時援助が必要</u> である児童・生徒。	他人との意思の疎通に困難があり、日常生活を営むのに <u>頻繁に援助を必要</u> とする児童・生徒。	他人との意思の疎通や日常生活を営む際に困難が見られる。 <u>適宜援助を必要</u> とする児童・生徒。	生活年齢に応じながら、 <u>経験の積み重ね、他人との意思の疎通や日常生活への適応を重視する</u> 児童・生徒。	日常生活や社会生活及び将来の職業生活の <u>基礎を育て</u> ることをねらいとする児童・生徒。	卒業後の家庭生活、社会生活及び職業生活などの <u>関連を考慮した、基礎的な力を育てる</u> ことをねらいとする児童・生徒。	卒業後の家庭生活、社会生活、及び職業生活などの <u>関連を考慮した、発展的な力を育てる</u> ことをねらいとする、比較的障害の程度が軽度である児童・生徒。
ねらい	教師の直接的な援助を受けながら、児童・生徒が体験し、事物に気づき注意を向けたり、関心や興味をもったりすることや、基本的な行動の一つ一つを着実に身につけたりすることをねらいとする。	教師からの言葉掛けによる援助を受けながら、教師が示した動作や動きを模倣したりするなどして、目的をもった遊びや行動をとったり、児童・生徒が基本的な行動を身につけることをねらいとする。	児童・生徒が自ら場面や順序などの様子に気付いたり、主体的に活動に取り組んだりしながら、社会生活につながる行動を身につけることをねらいとする。	児童・生徒が自ら主体的に活動に取り組み、経験したことを活用したり、順番を考えたりして、日常生活や社会生活の基礎を育てることをねらいとする。	児童・生徒が自ら主体的に活動に取り組み、目的に応じて選択したり、処理したりするなど工夫し、将来の職業生活を見据えた力を身につけられるようにしていくことをねらいとする。	生徒自らが主体的に学び、卒業後の生活を見据えた基本的な生活習慣や社会性、職業能力等を身につけられるようにしていくことをねらいとする。	生徒自らが主体的に学び、卒業後の実際の生活に必要な生活習慣、社会性、及び職業能力等を習得することをねらいとする。

※段階及び対象、ねらいは特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）第4章 第1節 5 段階の考え方（p 23～25）、特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（高等部）第5章 第1節 5 段階の考え方（知的－4）より要約

## 「キャリア教育に関する実態評価表」について

- 〈対象者〉 全学部全学年
- 〈目的〉 個別の指導計画を作成する際の参考資料とする。
- 〈時期〉 夏季休業中
- 〈引き継ぎ方法〉 基本的に各学部での持ち上がり資料とし、教育カルテに挟む。

### 【記入の仕方】

1. 各項目の文章を読み、当てはまる段階に達した時点で現在の学年に○をつける。(○できない場合は空欄で構わない)
2. 転入生は転入日と実態評価表を記入した日付を明記する。(記入欄あり)
3. 評価の際は、キャリア教育と段階に関する説明を参考にする。
4. 評価について補足説明等が必要な場合は備考欄に記入する。

(記入例)

分類	段階 項目	社会生活につながる基本的な行動を身につける段階			日常生活や社会生活及び将来の職業生活の基礎を育てる段階		卒業後の家庭生活や社会生活及び職業生活などを考慮した基礎的・発展的な力を育てる段階	
		1	2	3	4	5	6	
A 人間関係・社会形成能力	①情緒の安定	身近な人や物の存在で落ち着くことができる。	不安や緊張を表情等で表すことができる。	好きなことや得意なことであれば落ち着いて活動できる。	支援を受けて、変化や苦手なことがあっても概ね安定して活動することができる。	変化や苦手なことがあっても自分で情緒の安定を図りながら活動することができる。	常に情緒は安定しており、落ち着いて活動することができる。	
		小① ② 3 4 5 6	小1 2 ③ 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	
	②意思表示 ※ 国語に関する力	好き嫌い、快不快などを自分なりの表現で表すことができる。	好き嫌い、快不快を自分から伝えようとする事ができる。	自ら好き嫌い、快不快を伝えることができる。	自分の気持ちを他者に分かるように伝えようとする事ができる。	自分の気持ちを他者に分かりやすく伝えることができる。	時と場に応じて自分の意思を伝えようとする事ができる。	
		小1 2 3 4 5 6	小① ② 3 4 5 6	小1 2 ③ 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	
	③挨拶・応答 ※ 国語に関する力	名前を呼ばれると目や頭など体の反応がある。	促せば、頭を下げたり手を挙げたり挨拶や応答の模倣することができる。	自ら身近な人に簡単な挨拶や応答することができる。	自ら身近な人に挨拶や応答をすることができる。	身近な人に状況に応じた挨拶や応答をすることができる。	自ら誰にでも挨拶や応答をすることができる。	
		小1 2 3 4 5 6	小① ② ③ 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	小1 2 3 4 5 6	

中学部は「中1 2 3」  
高等部は「高1 2 3」  
と記載してある。

## 2 保健体育科研究班

第60回令和元年度宮崎県学校体育研究発表大会の研究指定を受け、小・中・高の授業発表及び研究発表を行った。

### ア 研究主題

「生涯にわたり仲間とともに運動やスポーツの楽しさを実感できる体育科・保健体育科の在り方」  
～自主性を育み、つながりのある指導を通して～

### イ 研究の仮説

主に体づくり運動や昼休みでの健康指導において、児童生徒が運動する楽しさや心地よさを味わえるような活動内容を工夫することによって、自主的に運動する意欲をもち、運動に親しみ、卒業後も継続して運動に取り組もうとする児童生徒を育成することができるであろう。

### ウ 研究内容

- (1) 小・中・高の12年間の必修領域である「体づくり運動」の単元を通して授業研究・授業発表の実施
  - ①「体づくり運動」の単元構造図の作成
  - ②主体的・対話的で深い学びにつながる「学習カード」の作成
  - ③学習カードの作成
- (2) 「運動に親しみ、継続して運動しようとする児童生徒の育成」のための研究発表の実施
  - ①体づくり運動
  - ②昼休み時間を活用した健康指導（健康セミナー）
  - ③長期期間中の運動チェック（やったぜ！カード）
  - ④卒業生への運動に関する実態調査

### エ 成果と課題

- 手軽で簡単な運動を段階的に取り組むことで生徒の意欲向上につながり、繰り返し行うことで技能が高まり、長期休業中でも体づくり運動で行った運動に取り組めた生徒が増えた。
- 健康セミナーに取り組んだ生徒へのアンケートより、楽しみながら活動している生徒が多いことが分かり、肥満傾向の生徒の減少が見られた。
- 小・中・高の単元と活動内容の充実
- 新学習指導要領による評価基準表の作成

## 九州地区学校体育研究発表大会

令和2年10月30日（金） 場所：宮崎市総合体育館 対象学年：高等部3年

### 3 小学部研究班

#### 【1】小学部1学年研究班 「児童の主体的に学ぶ力を育てる授業づくり」

##### ア 研究のねらい

子どもたちが毎日行っていて身近な「朝の会」を本研究では取り上げ、児童が係の仕事について知り、自分のやりたい仕事を選択しながら意欲的に取り組もうとする気持ちを育み、主体的な活動を導くことをねらいとした。

##### イ 研究の内容

###### (1) 題材名「朝の会をしよう」

###### (2) 目標

子どもたち一人ひとりが朝の会の係の仕事について知り、自分のやりたい仕事を選び、主体的に取り組むことができる。

###### (3) 内容

- ・ 1年生は17人と人数が多いため(1・3組)と(2・4組)の2クラスに分かれて実施した。

内容	時期	手立て	
		1・3組	2・4組
係の仕事を知る やってみる	1学期 (6～7月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童の実態把握を行い、教師が役を当てる。</li> <li>・ 1つの係を長期間実施した。</li> <li>・ 教師がモデルを示したり、寄り添ったりしながら一つ一つを丁寧に行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 係を日替わり、輪番制で実施し、全員が一度すべての係を経験できるようにした。</li> </ul>
係の仕事を選ぶ	9月18日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 以前やっていた係を1週間実施して係の仕事を思い出す。</li> <li>・ やりたい係の仕事に顔写真を貼ることで視覚化した。</li> </ul> <p>その際、顔写真を貼る枠は、1つにして児童同士の係が重ならないようにした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 朝の会の様子をビデオで観ながら係の仕事にはどのような活動があったかを思い出せるようにした。</li> <li>・ やりたい係の仕事に顔写真を貼ることで視覚化した。</li> <li>・ 手元に係の仕事の一覧を用意して教師と相談しながら決められるようにした。</li> </ul>
選んだ係をやってみる	9月24日～	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 誰がどの係かを毎回ボードに顔写真を貼って掲示した。</li> <li>・ 1ヶ月に1回の程度で係の変更を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 誰がどの係かを毎回ボードに顔写真を貼って掲示した。</li> <li>・ 2～3週間に1回の程度で係の変更を行った。</li> </ul>

(4) 実践の工夫点

1・3組	2・4組
<p><b>【健康観察係】</b> ・台詞を書いたカードを作った。</p> <p><b>【仕事の整理】</b> ・どれが大事な仕事かを見極め、仕事の整理をした。</p> <p><b>【立ち位置】</b> ・足形のマットを用意し、どこに立てば良いのかを視覚化した。</p>	<p><b>【朝の歌】</b> ・CD ラジカセの再生ボタンにシールを貼り、どこを押せばよいかを分かりやすくした。</p> <p><b>【時間割】 及び【カード】</b> ・カードを分厚くすることで握りやすくし、児童が取り外ししやすいようにした。</p>
<p><b>【係分担表】</b> ・顔写真付きの係分担表を常時掲示し、誰がどの係かを分かるようにした。</p> <p><b>【環境整備】</b> ・刺激になる物は、排除した。</p>	

ウ 成果と課題

- 離席をせず、座って最後まで朝の会に参加できるようになった。
  - 健康観察で友達の名前を呼ぶことで、名前を覚えることができた。
  - 「○○くん・ちゃんは、今日お休み？」などのようにクラス以外の友達も意識するようになった。
  - 自分の係活動に責任をもって取り組むようになった。
  - 主体的に楽しんで係をするようになった。
  - 友達を思いやる行動が見られるようになった。  
(返事が難しい友達には、同じ目線に立って手を差し伸べタッチを求めたり、邪魔になりそうな時は、椅子の位置を考えて移動したりするなど。)
  - 教師の支援やモデルがなくても一人でできるようになった。
  - 時間割の文字が読めるようになった。
  - 欠席の児童の仕事もやりたがるようになるなど、積極的に参加するようになった。
  - 係を選ぶ時に、自分でやりたい係を選ぶことができるようになった。
  - 人前で話すことに抵抗があった児童が堂々と話せるようになった。
- 今回は、1・3組と2・4組に分かれて朝の会を実施した。他のクラスの組み合わせでも実施することで児童同士のつながりを広げていきたい。

【2】小学部2学年研究班 「食に関する知識や経験の広がりを目指した指導・支援の在り方」

ア 研究のねらい

1年生時に食事をテーマに、主として体験的な学習を中心に実践し、自分でやってみようという意欲を育む生活単元学習に取り組んできた。前年度1年間の成長により、改善した部分もあるが、偏食や肥満傾向、食事マナーの課題など、食に関する課題のある児童がまだ多く、適切な食習慣を身に付けていく重要な時期でもある。今年度は食に関する経験に加えて、児童の興味・関心を広げ、よりよい食習慣を身に付けられるように、食事の知識に関する学習も取り入れ、授業研究や教材・教具等の工夫を行い、児童が主体的に取り組めるような指導・支援の在り方を探ることにした。

イ 研究の内容

(1) 実態把握

前年度の校内研資料や個別ファイル資料などをもとに、食に関する実態について共通理解を行い、食に関する課題や願いを児童一人ずつ出し合った。また、偏食傾向チェックリスト（広島市西部こども療育センター食育研究会）を行ったり、保護者の方に食事の記録をつけていただいたりした。

(2) 食育の授業研究

食育の実践例を共有し、どのような内容が児童に適しているかを検討したり、発達段階に応じた指導内容の確認を行ったりした。本グループは「偏食傾向の児童が多い」「肥満傾向の児童がいる」「食事のマナーに課題をもっている児童が多い」ということが課題としてあげられる。そこで単元で取り扱う内容を「季節の食べ物」「3つの栄養について」「元気な体(肥満になったらどうなるか)」「食事のマナー」とした。

(3) 食育の授業実践

単元名「食育はかせになろう」(全10時間)

学習内容	ねらい	指導時間
食事について勉強しよう (オリエンテーション)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食育という言葉の意味を知る。</li> <li>・食べ物は体に中に入ると栄養が変わる。</li> <li>・栄養は3つに分けることができることを知る。</li> </ul>	1時間
3つの栄養素について ～季節の食べ物～	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野菜を季節ごとに分類する。</li> <li>・3つの栄養素(赤・黄・緑)のバランスが悪いとどうなるかについて知る。</li> </ul>	1時間
3つの栄養素について ～元気な体～	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3つの栄養素について、どんなバランスで食べるのがよいかを考える。</li> <li>・「肥満＝元気な体ではない」ということを知る。</li> <li>・おもりを体につけて、太ったらどうなるかの疑似体験をする。</li> </ul>	1時間
冬野菜の収穫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・畑で育てた野菜を収穫する。</li> </ul>	2時間
冬野菜をつかって クッキング(事前学習) 【研究授業】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちで収穫した冬野菜を使って作れる料理の中から、食べたい料理を選ぶ。</li> <li>・決定した料理に入っている食材を知る。</li> <li>・野菜の名前当てクイズをする。</li> </ul>	1時間

冬野菜をつかって クッキング（調理活動）	・豚汁づくり	2時間
冬野菜をつかって クッキング（振り返り）	・豚汁づくりを振り返り、栄養のバランスよく食べることができたかを確認する。 ・食事をしている様子を振り返り、食べるときに気を付けること（マナー）について考える。	1時間
まとめ	・これまでの学習を振り返り、学習したことをポスターにまとめる。	1時間

#### （4）手立てや工夫

学習計画表をオリエンテーションで示し、学習内容の全容をつかませ、毎時間提示することで何の学習をしているのかを明確にし、見通しをもって学習に参加することができるようにした。また、前時の学習内容を導入として毎回振り返ることで、学習の定着、理解度を確認した。さらに、学習意欲を高めるため、食育マスターメダルを用意し、学習が終わるごとにシールを貼るようにした。

3つの栄養素についての学習は、小学部低学年の段階では難しい内容ではあるが、適切な食習慣を身に付けるための指導・支援を行う上で必要な内容であるため、本単元で取り扱うこととした。食材カードの台紙に3つの栄養素の色を使用し、自分たちで3つの栄養（赤・黄・緑）ごとに食材を分類できるようにした。また、視覚的に色で提示することで、バランスのよい食事なのかどうかを児童が判断する材料ともなった。難しい学習内容であるからこそ、視覚的な教材・教具を工夫したり、難しい言葉は使わずに、「緑（の食材）を食べたら病気から守ってくれる」など、普段耳にする言葉を使用してイメージしやすくしたりした。

#### ウ 成果と課題

- 食に関する知識が広がり、給食時に「野菜3、肉3、ご飯3（栄養バランス）食べる」「野菜を食べると病気にならない」等の会話が増えたり、ただ食べるのではなく、食材の名前やその栄養素の色を言う等、入っている食材を意識したりするようにもなった。
- 今まで苦手で見ることすら嫌だった食材にも挑戦しようとする姿が見られたり、完食できる日が増えたりした。家庭でも苦手な食材を自ら口にしたり、食べられるものが増えたりしていると保護者から報告があり、学校の調理活動や給食だけでなく、家庭においても般化されている。
- 興味・関心が高い体験的な活動は「調理」であるため多く取り入れたいが、肥満傾向の児童がいるため、調理活動を多く実践することが難しい。
- 家庭での食生活スタイルが児童の食習慣に影響を及ぼしている部分もあったり、食に関する悩みを抱えていたりするため、連携の難しさを感じる家庭もあった。
- 知識の定着には個人差があるが、児童がさらに適切な食習慣を身に付けられるよう、食に関する知識の学習や体験的な活動を取り入れ、具体的に繰り返し指導していくことが必要である。

#### ※参考文献

- ・広島市西部こども療育センター食育研究会資料
- ・偏食傾向チェックリスト（なぎさ園）
- ・食育の計画例（北海道文教大学研究紀要）
- ・特別支援学校、小学校の食育事例資料
- ・食育と偏食と感覚の特性（北海道札幌養護学校教諭青木一真）
- ・学校給食は食育の教材（教育家庭新聞）
- ・食に関する指導の手引 第二次改訂版（文部科学省）
- ・食育基本法（農林水産省）
- ・知的障害のある子どもの健康問題に関する調査報告（特別支援教育総合研究所）

【3】小学部3学年研究班 「児童が主体的に関わり合う力を育てる指導・支援の工夫」

ア 研究のねらい

小学部3年生は15名と児童数が多いうえ、1・2年生時は教室が離れていたため、朝の会や生活単元学習など、学年全体での合同学習を行うことが難しかった。昨年度は、みや央祭でペアでの発表を経験し、機会があるごとにその二人組での活動の場を設定したことで、ペアの友達同士がお互いに関わり合いながら主体的に活動することができるようになってきた。

今年度はそのペア活動から、小集団や学年全体での活動に幅を広げることで、児童が自分から様々な友達と関わりたいという意欲をもち、それぞれの手段・方法で主体的に活動できるようになることをねらいとした。

イ 研究の内容

1学期から、誕生会やお楽しみ会など、3学年全員で活動する機会を定期的に設けた。また並行して、朝の会や生活単元学習などを隣接学級等で行うことで、学級や隣接学級の小集団から学年全体の友だちを意識できるようにした。また2学期も引き続き誕生会などの合同学習を行いつつ、「みんななかよし3年生 ～はないちもんめを楽しもう～」という単元で、集団の中でルールのある遊びを通して、友達との関わりの幅が増えるよう単元を設定して合同学習を行ってきた。

【1学期】様々な集団での活動を通して、子どもたちの実態や新たな目標の整理を行った。

	学習活動	児童の実態や様子
4月	対面式	・前学年時に同じクラスだった児童や、ペア活動したことがある児童のことはよく知っていたが、それ以外の児童の顔や名前は曖昧である。 ・学年での活動に消極的な児童や、長時間同じ場所で活動することが難しい児童もいる。
5月	買い物学習 校外学習	・自分から他クラスの友達に声をかけたり、一緒に遊んだりする姿はあまり見られず、互いに関心が薄い。 ・教師を介して、友達とやりとりすることが多い。
6月	カフェを開こう	・集団が苦手な児童も、小集団であれば友達を意識し、意欲的に参加できる場面が見られた。
7月	ピザを作ろう	・他クラスの児童と関わる場面を意図的に作ると、自分から友達に接点をもとうとする児童や、友達と活動する楽しさを感じている児童が出てきた。

【2学期】1学期に引き続き、指導・支援の内容や方法を検討し、共通理解した上で、次の実践へつなげることで、ねらいが達成できるよう授業の評価・改善を重ねた。

単元名 「みんななかよし3年生 ～はないちもんめを楽しもう～」(1～5時間/全7時間)

<評価・改善の記録> ※下線部分は、前時からの改善点(A)

	活動内容(P)	教材・教具・支援など(D)	児童の評価(C)
1時間目	・教師のはないちもんめを見る。 ・チーム分け、やり方、ルールの説明を聞く。 ・はないちもんめをする。(5回勝負)	・歌詞の精選と歌詞カード ・ミニホワイトボードと顔写真カード(チーム提示) ・リーダー用のメダル ・スタートライン ・○回戦を提示するカード	・はないちもんめに興味を示していたが、歌い出しのタイミングが分からず活動を楽しむことが難しい児童が多かった。 ・オープン教室では、思い切り動くことが難しいようであった。

2 時 間 目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師のはないちもんめを見る。</li> <li>・やり方、ルールの確認を聞く。</li> <li>・<u>チーム名を話し合いで決める。</u></li> <li>・はないちもんめをする。</li> <li>・<u>勝敗を知る。</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場所を<u>遊戯室</u>へ</li> <li>・<u>歌詞カードの文字の色</u></li> <li>・<u>スタートラインの色</u></li> <li>・<u>先行チームの王冠</u></li> <li>・歌が始まる前の<u>教師の言葉掛け</u></li> <li>・<u>じゃんけんグッズ</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やり方が分かるようになり、リーダーに立候補したりリーダーをサポートしたりする児童が出てきた。</li> <li>・教師の言葉掛けで、色々な友達と手をつなぐ児童がいる一方で、友達が固定化している児童もいた。</li> </ul>
3 時 間 目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やり方、ルールの説明を聞く。</li> <li>・<u>話し合いをするときに気を付けることを知る。</u></li> <li>・チーム名を話し合いで決める。</li> <li>・はないちもんめをする。</li> <li>・勝敗を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チーム名やほしい友達を決めるための話し合いをする際の<u>教師の言葉掛け</u></li> <li>・手をつなぐときに、できるだけ子どもたちだけでできるような<u>教師の入り方や言葉掛け。</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の言葉掛けの支援を受けて、チーム名を提案したり、どの友達がほしいかホワイトボードを見せて一人一人に聞いたりすることができた。</li> <li>・自ら友達に手を伸ばしたり、名前を呼んだりして、手をつなぐ児童が出てきた。</li> <li>・話し合いが長くなると、集中が持続できない児童がいた。</li> </ul>
4 時 間 目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やり方、ルールの説明を聞く。</li> <li>・チーム名を話し合いで決める。</li> <li>・はないちもんめをする。</li> <li>・勝敗を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いの時間の目安が分かる<u>タイマーやベル</u></li> <li>・<u>箱椅子</u></li> <li>・最終的に誰を選んだかをリーダーがメンバーに伝えるときの教師の<u>言葉掛け</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チームのメンバーが、話し合いの場に来ることが難しい児童の側まで行って、話し合いをしようとする意識が芽生え始めた。</li> <li>・ほしい友達を決めるとき、自分の考えを伝えたり譲ったりするなど、互いに協力して話し合いを進めようとする姿があった。</li> </ul>
5 時 間 目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>新しいチームの発表を聞く。</u></li> <li>・やり方、ルールの説明を聞く。</li> <li>・はないちもんめをする。</li> <li>・勝敗を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>活動の流れカード</u></li> <li>・新しいチームで活動することに期待感もてるような雰囲気作り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しいメンバーになったが、子どもたちだけで手をつなぎ、「せーの！」とかけ声をかけて歌う場面が出てきた。</li> <li>・友達から誘われると、自ら手を出すことができるようになった児童がいた。</li> </ul>

#### ウ 成果と課題

- 「はないちもんめ」を通して、手をつなぎ友達と関わることが、ルールとして行っていたものだが、回数を重ねるごとに誰とでも自然とつなげるようになった。
- 同じ遊びを、いろいろな支援を加え変化させながら繰り返し行うことで、子どもたちが見通しをもって取り組むようになり、子どもたちがまたやりたいと思える学年の遊びになった。交流学习では那珂小学校の友達と一緒に取り組み、般化することができてよかった。
- リーダーという役割を作ることで子どもたち主体の「集団遊び」が成り立った。また、細かな支援を積み重ねることで、子どもたちがリーダーとしての役割を意識して行えるようになった。
- 「はないちもんめ」は、遊戯室等の広いスペースが必要であった。オープン教室程度のスペースでも、学年全体でできる活動を増やせるとよい。
- 学年全体の集団だけでなく、I・II課程1クラスずつ程度の小集団での活動もできるようになると、より深く広い関わりがもてるようになるのではないかと。

【4】小学部4学年研究班 「児童が主体的に活動できる合同学習の授業づくり」

ア 研究のねらい

昨年度の研究において、誕生会の係を自分で選び、取り組むことにより、自発的に係を行いながら誕生会に参加することができた。また、2回続けて同じ係を担当することにより、見通しや自信をもって係の役割を果たす姿が見られた。一方、児童同士のみで誕生会を進めるまでには至らなかった。また、司会の係など、一部の児童が経験するにとどまった。加えて、誕生会へのプレゼントを児童で作成するなど、より主体的な活動になるための工夫が必要であると考えた。

そこで、本年度は、係活動を行う際に、児童同士で助け合えるように、ペアを作って活動する工夫や仕組みを作ることにした。また、誕生会へのプレゼントや、会の中で使うゲームの道具を児童が作成するなど、より主体的に誕生会に参加できる合同生単の学習内容の工夫を行うこととした。

イ 研究の内容

(1) 内容及び期間

期 間	内 容
4・5・6月	研究内容の決定・職員係分担、第1回オリエンテーション、4月誕生会
7・8月	4月誕生会の反省、児童の主体的な動きの洗い出し、2・3学期係決め及び誕生会の計画、教材作り
9・10月	第2回係決め、プレゼント制作、ゲームの道具制作、9月・10月誕生会、誕生会反省、学習指導案検討、合同生単の工夫
11・12月	第3回係決め、ゲームの道具製作、11月（研究授業）・12月誕生会、研究授業反省、誕生会反省、合同生単の工夫
3学期	第4回係決め、ゲームの道具製作、誕生会、研究のまとめ

(2) 授業実践について

- ① 単元名「たんじょうかいをしよう」
- ② 目標
  - ・ 誕生会の係を選び、係の役割を理解し、主体的に取り組むことができる。
  - ・ ペアの友達を意識し、誕生会に参加することができる。
- ③ 手立てや工夫
  - ・ 係
    - 児童が見通しをもって活動したり、自信をもって係の仕事を行ったりできるように、誕生会の流れを毎回同じにし、係を2回固定で行うようにした。
  - ・ 児童同士のペア
    - 相手との関わり方を学び、一緒に活動したり、ペアの児童を手本にしたりできるように、児童同士のペアを作り、そのペアを固定することにした。ペアの児童を意識できるように誕生会以外の合同学習でもペアでの学習を行ったり、学習時の座席をペアで隣にしたりした。
  - ・ 教材・教具

児童の主体的な動きを引き出すために、司会カードや係の道具などの視覚的な教材・教具を準備した。

・ 合同生単

誕生会に主体的に参加できるように、会の中で行うゲームの道具や誕生者へのプレゼント制作を合同生単の授業で行った。ゲームの道具は、ボウリングのピンとマイボール、羽子板を制作した。プレゼントは花を制作し、児童全員の花を集めて花束にし、誕生者にプレゼントした。

ウ 成果と課題（○は成果、●は課題）

- 司会カードやくす玉などの係の道具を工夫したことにより、児童が自分の力だけで係の仕事を行うことができた。
- 誕生者へのプレゼント制作やゲームの道具の制作を合同生単で行うことにより、楽しい雰囲気の中で、主体的に制作することができた。また、児童同士で道具の貸し借りをしたり作品を見せ合ったりする中で、児童同士の関わり合う姿が見られた。
- 合同生単の中で、視覚的な支援を行う教材を多く用いることにより、児童にとって分かりやすい活動内容となった。
- 誕生会で使用するプレゼントやゲームの道具を児童が制作することにより、誕生会への参加意欲が高まった。
- 誕生会の流れを毎回同じにすることにより、児童が見通しをもち、主体的に活動することができた。
- ペアを固定することにより、相手を意識し、関わり合いをもととする姿が見られた。
- 誕生者の紹介の場面で、担任からの紹介だけでなく、他の児童が誕生者の良さを発表する場面を設けると良かった。また、担任からの紹介についても、児童が行う場面があっても良かった。
- 誕生会のゲームの進行や、おやつ準備についても児童ができるように工夫すると良かった。
- 誕生会や合同生単での活動以外でも、児童同士の関わり合いや主体的に参加する意欲を持続させる工夫を行いたい。

【5】 小学部5 学年研究班 「プログラミング的な考え方を育てる授業づくり」

ア 研究のねらい

ICT 機器を児童の実態に応じて活用すれば、発達段階に応じたプログラミング的な考え方が身につくのではないだろうかと考え、ICT 機器の活用の工夫や授業実践における工夫について探ることを研究のねらいとした。

イ 研究の内容

(1) チームのゴールイメージ

- ① 児童が主体的に学習に取り組むための実態に応じた ICT 機器を準備し、活用する。
- ② プログラミング的な考え方を育てる授業（題材、内容、指導形態、教材等）を検討する。

(2) 主な活動内容

月	主な活動内容			
5月	○アリロとパネルを使った活動（ペア活動） ・いろいろな種類のパネルを使ってアリロの動きを確認。 ・パネルを組み合わせてアリロをゴールさせる活動。			
6月 7月	○アリロとタブレットを使った活動（ペア活動） ・タブレットで操作しながらアリロを自由に動かす。 ・ペアの友達がいるところまでアリロを動かす。 ・児童の実態に応じて、コーンを回る、アリロを家の中に入れる、トンネルをくぐらせる。			
9月 10月	○アリロやその他の機器を使い、自分の課題に挑戦する活動（課題別グループ活動）			
	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
	○タブレットでのアリロの操作 ・トンネルくぐり ・駐車場に停車 ・車庫入れ	○パネルとアリロの動きの確認（直進、右折、左折） ○複数のパネルでコースづくり	○リモコンを使った車のコントロール ・目標物を見る ・目と手の協応	○タブレットでのアリロの操作 ・校舎を周る。 ・S字カーブ
11月 12月	○アリロやその他の機器を使い、自分の課題に挑戦する活動（課題別グループ活動）			
	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
	○自分がアリロになってプログラミングカードのとおり動く。 ○アリロをプログラムする。	○パネルとアリロの動きの確認（直進、右折、左折、音楽、ポートと川、アイス） ○複数のパネルでコースづくり	○リモコンを使った車のコントロール ○タブレットでのアリロの操作 ・目標物と進行方向を見る ・目と手の協応	○タブレットでのアリロの操作 ・人形を乗せた車を牽引 ・牽引したままトンネルくぐり

3 学期	○アリロやその他の機器を使い、自分の課題に挑戦する活動（課題別グループ活動）			
	A グループ	B グループ	C グループ	D グループ
	○ 3 × 3 マスのなかで、アリロを目的地まで移動させるためのプログラムをする	○ パネルとアリロの動きの確認(直進、右折、左折、音楽、ポートと川、アイスとキャンディー) ○ 複数のパネルでコースづくり	○ コントロールカーを使った車のコントロール ○ タブレットでのアリロの操作 ・ 目標物と進行方向を見る ・ 目と手の協応	○ タブレットでのアリロの操作 ・ 人形を乗せた車を牽引 ・ トンネル ・ 坂道

### (3) 手立てと工夫

- ・ 毎時間、活動の導入段階でアリロを使って活動する際の4つの決まりを確認し、はじめをもって活動に取り組ませるようにした。
- ・ 活動の終わりには、それぞれが取り組んだ課題を紹介し合う時間を設け、児童に達成感をもたせるようにした。
- ・ アリロ免許証を作成したり、検定試験時にゴールすると旗があがる装置を使用したりして、児童に達成感や意欲をもたせるようにした。
- ・ 児童の実態に応じたグループを編成し、初めはじっくりと取り組んで活動内容を理解させ、難易度を少しずつ上げながら挑戦させることで達成感をもたせるようにした。
- ・ 店や駐車場、トンネルなどを置いて街を想定したコースを作ったり、好きな人形を牽引させたりすることで意欲をもたせた。
- ・ ペアの児童の組み合わせに配慮したり、教師とマンツーマンで活動したり、活動の場を変えたり等、環境を整えることで児童が集中して活動に取り組めるようにした。

### ウ 成果と課題

- このテーマを設定したことにより、職員がプログラミング教育について研修することができた。
- 後半になるにつれて児童が集中して自ら考える時間が増え、プログラミング的思考に結びついてきた。
- 児童の実態に応じてグループを編成し、個に応じた支援を行ったことですべての児童に成果がみられた。
- 児童にどのような ICT 機器で学習させるのか、どのような指導をするのかの研修が職員に必要である。
- 教材としての ICT 機器を使うことのできる環境を整える必要がある。
- プログラミング教育とは何かを、職員が理解して指導にあたる必要がある。
- プログラミング教育で身に付けた力を、どのように普段の生活に活かしていくことができるのかを考えながら指導していく必要がある。

## 【6】小学部6学年研究班

「子供同士で助け合い協力することのできる授業づくり～「遊び中心」から「合同学習」へ～」  
ア 研究のねらい

昨年度は、生活単元学習での集団遊びを通して、子供たちが助け合う姿勢を育むことをねらいとして、研究に取り組んだ。

そこで、今年度は、修学旅行を見据え、事前学習やルールの設定を行い、子供同士の関わりの機会をもつことで、協力し主体的に活動することができるかどうか検証する。

### イ 研究の内容

#### (1) 授業内容

授 業	授業内容
修学旅行 事前学習 1	・修学旅行の全体像～いつ、どこへ、だれと、交通手段、旅程、約束事等
校外学習 「イオンモール宮崎店」 事前学習 1、2	・日程確認 ・昼食～メニュー決め ・買い物の練習
校外学習 2「大淀川学習館」「宮崎駅」 事前学習 1～3	・日程確認 ・調べ学習～大淀川の生き物 ・昼食場所とメニュー決め
修学旅行 事前学習 2～7	・調べ学習（グループ別）～メルヘン館、鹿児島中央駅、水族館 ・集団行動をする上でのきまりの確認 ・係決め ・ホテル内での過ごし方
修学旅行 事前学習 8 「研究授業」～「水族館をつくろう」	・調べた水族館の生き物を友達と協力しながら楽しく制作する～ペアでの活動～（ジンベイザメ作り）新聞紙まるめ、袋入れ、型抜き、模様貼り等
修学旅行 事前学習 9、10	・荷物の確認 ・係の確認

#### (2) 手立てと工夫

- ・ 修学旅行を見据え、日常的に友達との関わりをもたせる、という観点から朝の会や音楽室への移動時等、通常学級の児童が重複学級の児童を迎えに来たり、給食時の移動の際、重複学級同士で言葉かけし合ったりする場面を設けるようにした。
- ・ 校外学習では、修学旅行と関連付けた場所を選定し、修学旅行に対する意欲や意識付けを図った。
- ・ 事前学習として調べ学習を取り入れ、友達と協力したり、意見交換したりする場を設けるようにした。
- ・ 修学旅行の事前学習 1で確認した約束事（「ならんで、いっしょに」「じかんをまもる」「きょうりよくする」等）を日頃の授業や校外学習で繰り返し伝えることにより意識付けを図るようにした。
- ・ 修学旅行の車中でのレクリエーションについて、重複学級の児童が準備や運営をすることで、分担しながら主体的に活動できるようにした。

## ウ 成果と課題

- 日常的な関わりや言葉かけにより、友達を意識した働きかけがみられるようになった。例えば、「朝の会」での係の仕事の際、ペアになっている友達を率先して迎えに行ったり、給食のカードを一緒に配ったり、優しく肩にタッチして順番を覚えてくれたりするようになった。
- 給食時の移動の際に重複学級同士の言葉かけも自主的にできるようになってきた。
- 朝の会だけではなく、持久走などでも「頑張っちゃうね」と声援を送ってくれた友達に対して、嬉しそうな笑顔で応えた児童など、自然な関わりがみられるようになった。
- 重複学級の児童も「3組さんがまだ来ていないよ」と、級友に言葉かけをし、待つことができるようになった。
- 重複学級の児童も友達の働きかけに対して、素直に応じることができ、スムーズに行動に移る場面が多くみられた。
- 友達同士の仲間意識が生まれ、欠席の友達のことを気にかけるようになった。
- 修学旅行は、子供たちにとっての一大イベントであり、また、安全上のこともあり、対大人や個々人の活動が多くなりがちであったが、移動やバスの乗り降りに関しては、通常学級の子供たちが急かす様子もなく、重複学級の子供たちを優先した移動ができていた。これは、日常的な取組や校外学習でのきまりとしても徹底してきたからではないかと考える。また、車内のレクリエーションも大いに盛り上がり、重複学級の子供たちへの感謝の言葉も聞かれた。
- 修学旅行中、「協力する」という場面があまりみられなかったことに関しては、安全上のことばかりではなく、職員が子供たちに任せきれないという固定観念がぬぐいきれないことも要因であったと考える。しかしながら、水族館では、通常学級の児童から重複学級の児童に対する自発的な働きかけがみられ、思いやりの気持ちが醸成されているのではないかとと思われる。